

# 身体の視点による絵本の読み聞かせについての一考察：一体感・触れ合う・話しかける身体

著者	春木 豊
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.29
号	No.2
ページ	20-24
発行年	2019-10-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15052/00003754">http://doi.org/10.15052/00003754</a>

# 身体の視点による絵本の読み聞かせについての一考察 ——一体感・触れ合う・話しかける身体——

春木 豊

## はじめに

筆者は障害のある子どもたちと40年以上にわたって関わっている。特別支援在任中は、自立活動専任（自立活動の指導について担任及び保護者への相談支援を担当）として、肢体不自由、知的、自閉症等の子どもの課題に、担任・保護者等と共に取り組み、一人一人の子どもの発達支援に携わってきた。自立活動専任は各自が独自の専門性を持って行うことが多く、筆者は動作法等に基づいた取り組みを行ってきた。

ここでは、「身体（以下からだを読む）」の視点での絵本の読み聞かせについて考察する。

絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手の相互作用によって成立する。読み聞かせをしようとする、と思うように読めないことはないだろうか。読み手に注目すると、姿勢が安定せず、首や肩に力が入り、声が子どもの所まで届いていないことがある。読み聞かせの経験を積み重ねることが解決につながるのだろうか。絵本の読み手と聞き手の身体の相互作用の視点から考えてみたい。

なお、絵本ワークショップで行った「絵本をからだで感じてみる」の取り組みも含めて報告する。

## 1. 絵本による相互作用の関係

絵本の読み聞かせの場面について、樋口・仲本は「絵本を通して人と人が感情や表情、行動を交わしあう姿があります。一緒に読んで楽しいね、嬉しいね、という気持ちで喜び合いながら、新たな感情や行動が生み出されています。その瞬間に出会う度に、絵本は保育者が読み聞かせているものではない、その場で互いに読みあっているものだなということを感じてきました。絵本を読みあうことで気持ちや行動を共有するという相互作用の関係が生み出される」（樋口・仲本2017：p6）とある。絵本の読み聞かせは絵とことばで表現さ

れる絵本の世界である。身近な生活や初めて出会う出来事をその場に居合わせた仲間と一緒に体験し、人間関係を育む場とも言える。影山は「読み聞かせテクニック」の中で、「頭で読んでいる大人と違い、子どもは絵本を実際に「体験」していること。「声を出す」ことではなく、「話を届ける」ことに意識を向けること。肩が触れ合う状態は、気持ちが伝染しやすく、ひとりが笑うと皆も楽しくなって、笑顔が増えること。読み聞かせは、「人間」対「人間」の温もりを伝えるもの」（影山2016）と述べており、絵本を子ども同士が共有できるように、読み手の心構え、読み進め方、絵本の大きさに応じた提示の仕方、個別か大人数かでの配慮など、様々な事前準備や関わり方の工夫が提言されている。

また、障害のある子どもたちに絵本の読み聞かせを行ってきた「本と子どもの発達を考える会」では、『絵本でひらく心とことば 読み聞かせで発達支援』の中で、愛着障害や発達障害、病弱児、重症心身障害児、医療的ケア児等の特別支援教育を必要とする子どもたちにとって、絵本の読み聞かせが、発達支援を行う大切な取り組みの一つであることが報告されている。

## 2. 絵本における身体の意味について

### (1) 一体感について

絵本の読み聞かせでは、絵とことばからなる絵本と、読み手と聞き手の3項関係による相互作用によってコミュニケーションが展開される。この相互作用には二つの側面があると考えられる。一つは、ことばのやりとりから人の気持ちや行動を共有する言語的コミュニケーションであり、もう一つは、子ども同士の身体に触れあいや読み手の身体との触れあいによる感覚・運動等による非言語的コミュニケーションである。絵本の読み聞かせは、読み

手と聞き手の身体を通した言語と非言語の相互作用によって展開されているとも言える。今野は、「子どものコミュニケーションとイマジネーションの発達にとって、絵本や物語の読み聞かせは大切な活動です。読み聞かせは、絵本や物語の楽しさを大人（母親、養育者、保育士）と子どもが共有する共同注意の典型的な場面です。そのためには、大人と子どもが心地よい身体の体験を共有することが大切です」（今野2017：p98）と述べている。つまり絵本の読み聞かせを楽しく展開するには、読み手と聞き手の心地よい身体の体験が大切であり、それは互いの身体を通したやりとりが共同注意の場面を作り出し、一体感を生み出すと言える。

では、心地よい身体の体験とはどのようなことなのであろうか。今野は、「相手の心にしみこむ心地よい安心・安全な身体接触の感じは、支援者の掌を柔らかく相手の身体に密着させることによって生まれます。それによって、相手は身体も心も支援者に大切に包み込んでもらっている安心感を抱くことができます。そして、心も身体もリラックスした中で、支援者との間に信頼関係や一体感を形成することができます。そのためには、掌が本来持っている「感じる働き（センサー）」、「伝える働き（セnder）」、「共有する働き（ジョイント）」という3つの働きが大切」と説明している。また、「支援者の態度やことばがけの仕方も大切な要素になります。支援者は、「やさしい眼差し」、「やさしい笑顔」、「やさしい真心のこもった言葉」で、とけあい動作法を行います」（今野2017：p16, 17）とあり、手で触れることと、ことばがけの重要性を述べている。

## (2) 触れることについて

触れることについて、山口は、「通常、皮膚は自己と他者とを区別するための境界の役割を果たしている」、「互いが信頼し合い、触れ合っているとき「触れる—触れられる」という能動と受動の関係は混沌としたものになり、両者は別個の個体を持ちながらも分割しがたい一体感を感じる」（山口2003：p123）と述べている。筆者が障害児者の肩に触れていると、触れた時に、肩が硬く緊張していると感ずることがある。その硬さに注意を向け

ていると、掌に肩が動き出す感触が伝わってきて、肩と手がとけあった心地よい一体感を得る。乳幼児を抱っこした読み聞かせは、全身で触れあうことにより、手の機能である「センサー」、「セnder」、「ジョイント」の3つの働きを同時に機能させた状態での一体感と言える。

ここで大切なことは、触れることは、自分では気づかない快だけではなく不快の感情も直に伝えてしまうことである。また、相手の肩に触れた時の感触は、人によって受け取る感じ方が違うため、丁寧な触れ方が求められる。肩に軽く触れたつもりが、相手は押されたと感じたり、痛いと感じることがある。触覚には個人差があり、触れ方に工夫が必要となる。触れる—触れられる相互作用の難しさである。

## (3) 話しかけることについて

影山は、絵本を頭で読んでいる大人と違い、子どもは絵本を実際に「体験」としていると言う。また、読み聞かせでは、「声を出す」ことではなく、「話を届ける」ことに意識を向けることが大切であると述べている。

では、「話を届ける」とはどのようなことを言うのであろうか。

竹内は、「話す」とは、声によって人に働きかけ、相手の行動＝存在の仕方を変えること」であり「ことばとは、まず自分の中で生まれるけれども、相手のからだ＝存在の地点に至って、はじめてなりたつもの」（竹内2007：p32）と述べている。また、「「わたし」が「あなた」に、あることについて、からだの内に動いているイメージや情動を伝えようとするならば、それは顔の表情を動かし、手でさし示し、口を開いて声を出し、腰をよじったりふりむいたり、足踏みしたり、つまり「からだ」全体で表現しようとするものだ。声に発する言語とはその一部に過ぎない」（竹内2007：p80）とある。「話しかけのレッスン」の中で、「話しかける声は、単なる音波ではなく、相手と自分——話しかけるという行為にもっと即していえば、「あなた」と「わたし」——の間に起こる人間関係のかかわりのあらわれなのだ、ということになる。単にかかわろう働きかけようという主観の意志では

なく、存在と存在との間に起こる具体的なふれあいが声なのだ」(竹内2007：p155)とある。

筆者が体験した竹内レッスンでは、初日は自分の身体の緊張と身構えをほぐすことを行った。①緊張に気づくレッスン、②腕を揺する、③首をほぐす、④上体おこし、⑤息を合わせる、⑥下半身を揺するなど一日かけて行ったことで、緊張している自分の身体に改めて気づき、人に対しての構えが緊張を引き起こしていることに気づかされた。2日目は、①自分の声に出会う、②歌によるレッスン、③ことばのイメージを考える、④出会いのレッスン等を行い、ことばの理解を身体表現によって学ぶことができた。

身体の緊張をときほぐすには、ボディーワークが必要である。野口体操を考案した野口は、体操の目的を「人間のからだは中身が皮膚につつまれた生きた一つの袋である、その中身の微細な差異・ずれ・変化に気づく感覚を育てる、そのためには自分自身の中にもっている可能性を発見し、発展させ、それがいつでも、どこでも最高度に発揮できるように状態を準備すること」(野口1972：p13)と述べている。

### 3 身体の再検討

これまで述べてきたように、絵本の読み聞かせには、身体と身体の相互作用が大きく働いている。人には直接身体に触れる以外に、「パーソナルスペース(個人空間)」という、自己を守る空間を持っている。知らない人が自分のパーソナルスペースに触れると警戒心や不快感を持つことがある。このパーソナルスペースは対象者との関係によって変化する。安心できる関係は警戒心を弱めることになる。大人数で絵本の読み聞かせをした時に、集団に入れない子どもがいた場合、パーソナルスペースが一つの要因とすれば、安心できる身体に触れあいを模索することが重要になる。

また、相手の心に届きにくい声とは何であろうか。竹内の話しかけのレッスンで、相手に話しかける声は聞こえるが、声が拡散したり、相手の手前で声が止まり、声が届いていないことを体験した。竹内は、身体から生まれる声を相手に伝えるようにするために、自己の身体の緊張に気づき、

その緊張をほぐすことを踏まえて、相手の心に届くためのことばについて、ことばを身体から生み出す体験を提案し、実践を行ってきた。現代は、社会の複雑化により、対人関係の難しさに悩みながら生活に追われて生きているように思う。社会の中で、自己の身体はいつしか緊張し、こわばったままで日々を過ごしているのではないだろうか。改めて自己の身体に注意を向け、緊張に気づき、身体をほぐすことは大切なのではないだろうか。

## 4 読み聞かせの実践報告

絵本と身体の関係について考える取り組みとして実施した。

### (1) 概要

- ・絵本ワークショップ「絵本をからだで感じてみる」
- ・日 時：2019年12月7日(土) 13：30～15：00
- ・場 所：聖学院大学4402教室
- ・参加者：35名(内訳：大人14名、子ども14名、本学生1名、教職員6名)。参加した10家族の子どもの年齢は、乳幼児から小学校低学年
- ・目 的：身体の緊張を緩める前と後での読み聞かせを体験する。

### (2) 当日のプログラム

- ・体・身体・からだについて感覚統合理論による脳と感覚の関係についての講義
- ・姿勢の傾向と自分の姿勢チェック
- ・大型絵本「だるまさんシリーズ」を用いてだるまさんと同じ姿勢をとる
- ・野口体操(揺れる巨体では仰臥位姿勢になり、親子でからだを揺らす)の体験
- ・とけあい動作法の体験
- ・絵本『ノントンじどうしゃぶっぶー』の読み聞かせ
- ・触れる体験は大人と子どもが混在するグループを2つ作り、肩に触れて動きを伝える伝言ゲーム
- ・話しかけのレッスン

### (3) 絵本を使って姿勢を体験する

ワークショップでは、かがくいひろし氏の『だるまさんが』、『だるまさんの』、『だるまさんと』の3冊の絵本を取り上げた。これらは、だるまさんの動きと気持ちの変化が分かりやすく、親子で動きをまねて楽しめる絵本である。ここでは『だるまさんが』を用いた取り組みについて述べる。

#### 1) 楽座とあぐら座姿勢を体験

表紙の絵は、少し左に傾いた姿勢を感じさせるだるまさんである。表紙をめくると、足裏を合わせた楽座姿勢のだるまさんが静かに座っている。股関節は緩み、背筋を伸ばしているように見える。

#### 2) 側臥位姿勢を体験

目を閉じて四股を踏んでいるだるまさんが、「どてっ」と左側に転んで驚いた表情を見せている。

#### 3) 坐位で開脚から前傾姿勢を体験

片目を開けて四股を踏むが、空気が抜けて開脚のままぺしゃんこにつぶれる。

#### 4) 立位で少し尻を突き出す体験

ねむたそうな表情で四股を踏む。横から見ただるまさんは少し尻を突き出して「ぷっ」とおならをする。

#### 5) 蹲踞から一気につま先立ちを体験

困った表情で四股を踏む。ページをめくるとしっかり足裏を地面につけて背伸びをする。

#### 6) 両足をくっつけ立位体験

気合いの入った表情で四股を踏み、両脚をそろえた立位姿勢で「にっこり」の笑顔。

#### 7) 裏表紙を見る

だるまさんは後ろ姿で静かに座っている。

#### 8) 振り返り

各場面でのだるまさんの表情や動きから、気持ちのイメージを思い出す。

友達や家族と一緒に向かい合い、だるまさんの動きをまねすることで、だるまさんの気持ちを言葉や態度で表現する。

### (4) 参加者の様子

#### 1) 子ども

家族での参加がほとんどであり、家族でまとまって座っている。中には子どもの集団には入らず母親から離れない、室内に入れない、知っている友

だちがいるため室内を興奮気味に動き回る、母親に抱っこされてうとうとしているなど様々である。

#### 2) 大人

姿勢の話をする、保護者の多くが身体の硬さや肩こり、疲れのあることを訴える。

#### 3) 活動の様子

子どもたちに、『だるまさんが』を見せるとすぐに絵と同じポーズをとる。また、見せ合って喜ぶ。うまくできないで困っている子どもには手助けをする。筆者がある父親の肩に触れながら上下に動かす様子を見て、子どもたちは母親や友だちの肩に触れ、同じように肩を上下に動かして喜ぶ。また、自分で考えた動きを加えることもあった。大人は、その日の体調や体の硬さを気にして、とまどいながらポーズをとっていた。

休憩時間をさむと、子どもたちの興奮が高まり、落ち着きがなくなったため、予定していた『ノンタンじどうしゃぶっぶー』の読み聞かせから、触れる体験に変更した。絵本に関連させて、2つの列車グループを作り、参加者は縦に並んで床に座った。多動傾向のある子どもも一緒に取り組むことができた。伝言ゲームは、前の人の肩に手をのせ、前の人は受け取った手の動きや感じたことを更に前の人に伝えるものである。ゲームを始めるとすぐに室内が静かになった。伝わってきたことを一生懸命に次の人へ伝える参加者の様子があった。また、当初参加しなかった子どもたちも一緒に過ごす姿を見て、今ここが安心し合える心地よい場となっていると感じた。各グループとも、一緒につながった感じの印象を受けた。

## 5 考察

絵本の読み聞かせは、読み手と聞き手の安心できる関係により、絵本の世界を共有体験し、イマジネーションを広げていくと考える。安心できる関係について身体の視点から考えると、身体と身体心地よい触れあい体験がそこにあると言える。子ども一人一人は多様な存在であり、各々の身体も多様であるため、触れあい方や関わり方には配慮が必要となる。絵本の読み聞かせでは、共同注意による一体感を作り出すために、読み手の役割が重要となる。



読み手が聞き手に声を届けるには、絵本の絵とことばの関係を自分の身体感覚で理解する必要がある。例えば、絵本の中で、時間の違いを語る時、姿勢や身体の向きや声を出す方向を変えることにより、その違いや時間の流れを実感のあることばで伝えることができる。『ノントンぶらんこのせて』のぶらんこの立ちこぎをしているノンタンに、うさぎさんが声をかける場面がある。ノンタンとうさぎさんの距離はどのくらい離れているのか、ぶらんこをこぐノンタンの姿勢からは、どのくらいの大きさで、誰に向かってどのような声を発すればいいのか。うさぎさんの目線と姿勢から考えるとどんな声なのかなど、ノンタンとうさぎさんのやりとりを姿勢や目線や距離感など身体視点からイメージした読み聞かせができると、絵本の世界が大きく広がると考える。姿勢や距離感などは、自分の身体で感じる変化や違いに気づく感性が必要になる。読み手と聞き手のやりとりは、相互の感性によって展開するとも言える。読み手が、単なる音声ではなく、相手の心に届く声を獲得するためには、自分の感性を高める練習が必要である。社会は対人関係で成り立っている。子どもとの絵本の読み聞かせは、人との関係づくりの基礎となる大切な体験である。子どもたちの豊かな感性を育てるためにも、読み手の心と体である「身体」について、ボディーワークの体験をもとに、子どもとの身体と声の相互作用について見つめ直してはどうであろうか。

## 引用文献

- 樋口正春・仲本美央・読みあう活動研究会 (2017) 絵本から広がる遊びの世界 読みあう絵本 これからの保育シリーズ④ 風鳴舎
- 影山聖子 (2016) 今日から使える読み聞かせテクニック ヤマハミュージックメディア
- 竹内敏晴 (2007) 声が生まれる聞く力・話す力 中公新書 中央公論新社
- 今野義孝 (2017) 自立活動に取り入れたい！ 発達に障害のある子どものためのとけあい動作法 特別支援教育サポートBOOKS 明治図書出版
- 山口創 (2017) 皮膚は「心」を持っていた！ 「第二の脳」

ともいわれる皮膚がストレスを消す 青春出版社  
野口三千三 (1972) 原初生命体としての人間 三笠書房

## 参考文献

- 石井光恵・萩原敏行 (2004) 幼児が夢中になって聞く！ 絵本の読み聞かせと活用アイデア56 明治図書
- かがくいひろし (2008) だるまさんが ブロンズ新社
- かがくいひろし (2008) だるまさんの ブロンズ新社
- かがくいひろし (2009) だるまさんと ブロンズ新社
- キヨノサチコ (1988) ノントンじどうしゃぶつぷー 赤ちゃん版ノントン6 偕成社
- キヨノサチコ (1976) ノントンぶらんこのせて ノントンあそぼうよ！ 偕成社
- 鴻上尚史 (2012) 発声と身体のレッスン 魅力的な「こえ」と「からだ」を作るために 増補新版 白水社
- 竹内敏晴 (1983) 子どものからだのことば 晶文社
- 竹内敏晴 (1998) 日本語のレッスン 講談社現代新書 講談社
- 竹内敏晴 (1990) 「からだ」と「ことば」のレッスン 講談社現代新書 講談社
- 土田玲子・石井孝弘・岡本武己 (2013) 感覚統合Q&A 子どもの理解と援助のために 改訂第2版 共同医書出版社
- 徳永満理 (2010) 赤ちゃんにどんな絵本を読もうかな 乳児保育のなかの絵本の役割 保育が好きな実践シリーズ かもがわ出版
- 徳永満理 (2004) 赤ちゃんが喜ぶ読み聞かせ 絵本でスタート 0歳1歳2歳 フォーラム・A
- 長田実・宮崎昭・渡邊涼 (1999) 障害者のための絵でわかる動作法 はじめの一步 福村出版
- 野口三千三 (1977) 野口体操からだに貞く 柏樹社
- 本と子どもの発達を考える会 (2019) 絵本でひろく心とことば 読み聞かせで発達支援 かもがわ出版
- 宮崎昭・村主光子・田丸秋穂・杉林寛仁・長田実 (2018) 障害者のための絵でわかる動作法2 自立活動へのはじめの一步 福村出版
- 山口創 (2004) 子供の「脳」は肌にある 光文社新書 光文社
- 山口創 (2003) 愛撫・人の心に触れる力 NHKブックス 日本放送出版協会
- (はるき・ゆたか 聖学院大学基礎総合教育部特任講師)